

もくじ 整理中の水野家浮世絵から 歌川国貞(三代豊国)の役者絵『児雷也豪傑譚語』 1P
綾瀬・吉田家文書について 2P 寿展 めでたづくしーくらしのなかの吉祥紋ー 4P



《八代目市川團十郎の児雷也、三代目岩井糸三郎の夢野蝶吉》
歌川国貞(三代豊国) 嘉永5年(1852)6月、大判錦絵二枚続
【写真1】

足立史談

第598号

2017年12月15日

足立区教育委員会
足立史談編集局
足立区立郷土博物館内
〒120-0001

東京都足立区大谷田5-20-1

TEL 03-3620-9393

FAX 03-5697-6562

(29-308)

◆はじめに

平成十三年(二〇〇一)、郷土博物館は、栗原の旧家・水野家から貴重な古資料をご寄贈頂きました(「足立史談四〇二号」)。この資料の中には、第十五代水野弥三郎正秀氏(一八三二〜九五)の時代の収集品と考えられる浮世絵があり、改めて作品情報調査を進めています。現段階で確認できる

整理中の水野家浮世絵から

歌川国貞(三代豊国)の役者絵『児雷也豪傑譚語』

畑江麻里

この水野家の浮世絵を、作者やタイトル、版元といった情報の特定をして集計すると、一つの作品として確認できるものは九十六点になり、なかでも近年再度評価が高まってきた浮世絵師・歌川国貞(三代豊国)が歌舞伎の役者を描く「役者絵」が大

◆水野家浮世絵と『児雷也豪傑譚語』

水野家浮世絵は、まず作者ごとにみると、江戸後期の歌川派絵師の作品がほぼ全てを占め、特に歌川国貞が全体の約六割、歌川国芳の作品が二割となります。ジャンルごとでは役者絵が全体の約六割を占め、次に多い歴史画、美人画、名所絵などはそれぞれ約一割にとどまり、役者絵が圧倒的に多いことが判ります。

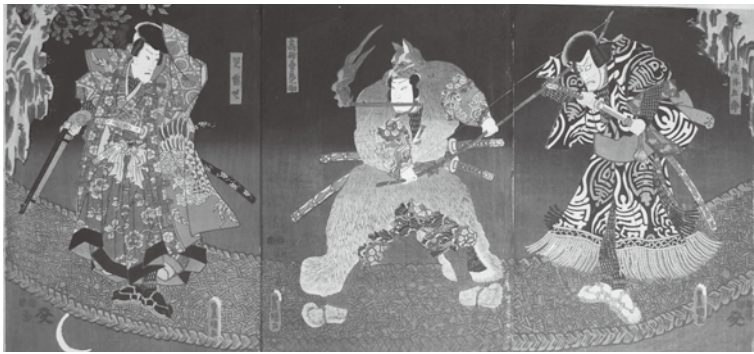
次に制作年代で見ると、天保後期から明治初期までの作品が見られ、浮世絵の出版許可をする際に「絵双紙掛名主(えぞうしかかりなぬし)」が捺す「改印(あらためいん)」の形状や絵師の署名の書体などから割り出すと、江戸後期のものが全体の九割以上を占め、なかでも特に弘化四年から嘉永五年(一八四七〜五二)迄に制作された役者絵が多い(四十四点)ことが判ります。

これらの役者絵では、弘化四年三

月より中村座で上演された『台比雪花隅色蘭(ぶたいのはなやよいのいろどき)』や嘉永五年七月に河原崎座で上演された『児雷也豪傑譚語(じらいやごうけつものごと)』など人気の歌舞伎演目の様々な場面が描かれた作品が含まれています。また、これらの人気演目には当時の江戸歌舞伎界を代表する八代目市川團十郎が出演しており、彼の役者絵が多く見られるのも特徴です。役者絵は、その演目の上演に合わせて制作されるため、歌舞伎の上演と密接に関わっているのです。

これらの水野家の浮世絵は、当時の旧家に伝来した作品群であり、特別なコレクションではありませんが、あたかもその舞台を観るような臨場感で再現された作品も数多くあり、現代の人々が観ても当時の歌舞伎をさも自分が観ているかのように感じることもできるのです。

この作品【写真1】もその一つで、歌舞伎『児雷也豪傑譚語』の一場面を描いています。この歌舞伎は、国貞らが挿絵を手掛け、長期に渡って出版された全四十三編の合巻の人氣作『児雷也豪傑譚』(一八三九〜六八)を河竹黙阿弥が脚色して劇化したものです。水野家浮世絵には合巻十編迄が脚色された初演の三種類の作品が含まれますが、この作品【写真1】のみ二点あります。この場面



歌川国貞（三代豊国）《五代目市川海老蔵の夜刃五郎、三代目嵐璃寛の高砂勇美之助、八代目市川團十郎の児雷也》嘉永 5 年（1852）6 月、大判錦絵三枚続 【写真 2】

は合巻第八編の「黒姫山の麓 国分寺山門の場」にあたり、国貞が合巻で描いた挿絵と同様の構図になっています。越後信濃の境にある黒姫山の麓国分寺の山門で争う児雷也と夢野蝶吉の姿を描いたものです。

水野家浮世絵には他にも、この演目の名場面である「妙香山 藤橋の場 藤橋のだんまり」を描いた作品【写真 2】があります。この二点の役者絵は改印の形状から上演前に売りに出されたことがわかります。浮世絵となったこの場面は、国貞が児雷也と山賊三人を大きく並べて描いた

合巻三編の挿絵とほぼ同じです。挿絵でもすでに物語のあら筋から離れ特別に表現されていますが、歌舞伎では、暗闇の中、登場人物三人が藤蔓の上でさぐりあいをする「だんまり」といわれる見所となる舞台に再現されたことがわかっています。

また、児雷也の鳳凰の陣羽織や、高砂勇美之助の狼の毛皮、夜刃五郎の全体に「寿の字海老」がちりばめられた衣装が目を引き、この時期の卓越した彫・摺の技術が伺えます。さらに角度によって雲母の光が見える仕掛けが施されています。

浮世絵で表現された衣装のきらびやかさやデザインも、歌舞伎のイメージに影響したものと考えられます。これらの作品は、役者絵の制作と実際の歌舞伎の上演や演出とを考える上での資料としても、とても貴重なものです。

◆おわりに

水野氏の所蔵した浮世絵はそのほとんどが役者絵であり、歌舞伎に興味があったことが伺えます。水野氏所蔵の浮世絵を眺めていくと、当時の人々の芝居や役者絵の楽しみ方も見えてきます。

他にも美しい女性を描いた美人画や、実際に生活用品として使用できる団扇絵なども確認でき、機会があればまた紹介したいと思います。

（郷土博物館 専門員）

綾瀬・吉田家文書について
郷土博物館

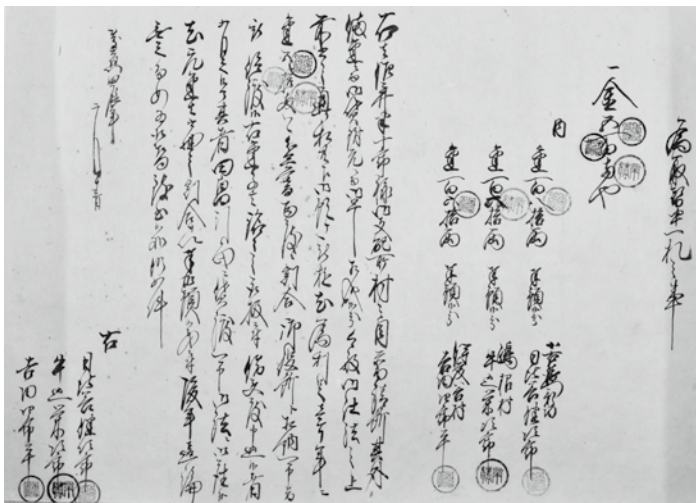
現在の綾瀬一丁目付近は、昭和四十一（一九六六）年一月一日まで伊藤谷本町（いとうやほんちょう）といいました。ほかに付近に同北町（きたまち）、同西町（にしまち）、同東町（ひがしまち）がありました。この町の名前の由来となったのは江戸時代の村名の伊藤谷村です。

伊藤谷で江戸時代から名主など重役をつとめた家が吉田四郎平家です。このたび同家の吉田康子さんから当家に伝来した貴重な古文書を郷

土博物館にご寄贈いただきました。内容は個別の古文書約七〇〇点と卷子装三巻（左上写真）です。そこで、本調査・整理に先立ち、概要を把握した中から、いくつかの資料をご紹介します。

■幕末の備金証文

注目資料の一つが「古文書 巻之二」に収められている為取替証文です（左写真）。重要なのが作成時期で慶応四（一八六八）年二月十三日となっています。この年月は戊辰戦争の時期に該当します。一月三日には鳥羽伏見の戦いが起こり、二月九日には有栖川宮等盛親王が大総督に



任命され、官軍の江戸進出が
始まります。同月十二日には
徳川慶喜、寛永寺で謹慎する
など、政情は極めて不安定で
した。

この証文は徳川家の代官、
佐々井半十郎が自普請(村の
負担で行う工事のこと)で用
いる「備金」という基金の運
用について、その貸付元に資
金を預けたという内容です。
備金に拠出したのは小右衛門
新田の日比谷健次郎、島根村
の牛込栄次郎、伊藤谷村の吉
田四郎平の三人です。いずれ
も素封家として知られ、三つ
の家で計五〇〇両という大金
を準備しています。

領主であった徳川家も官軍
が迫り当主が謹慎するという
緊迫した状況です。

村々が用水路や道路の管理
を行うとき、いまと同じで経
費が必要です。しかも同時期、
社会は強力なインフレに見舞
われました。本文中に一カ年
の利息が五〇両であると記さ
れています。年利一〇%とい
う高利に見えますが、おそら
く同時期のインフレを考える
と、妥当であるか、もしくは
低い金利と考えられます。

本文中には「今般御仕法之

為取替申一札之事

① 一金五百両也

② ③

④ 内 ⑤

金百八拾両 奉預候分

⑥

金百五拾両 奉預候分

⑦

金百六拾両 奉預候分

⑧

小右衛門新田

日比谷健次郎

島根村

牛込栄次郎

伊藤谷村

吉田四郎平

右者、佐々井半十郎様御支配所村々、自普請所其外
備金ニ而御貸付元ニ而御足し相成候分、今般御仕法之上、
前書之通り私共江御預ケ被遊、尤為利息尅々年ニ

⑨

金五拾両ツ、分呉候旨両度ニ割合、御役所江相納可申者

⑩

被 仰渡候、右金子者銘々之取扱ニ付、借受度申込候者

有之候て、其者田畠引当ニ貸渡可申御法ニ御座候、

尤元金者書面之割合ヲ以、奉御預候義ニ付、後年違論

無之ため為取替致書候、仍如件、

慶応四辰年

二月十三日

右

日比谷健次郎

牛込栄次郎

吉田四郎平

⑪

⑫

⑬

上」つまり備金へ資金拠出を
募る制度を設けたことが記さ
れています。代官とは言え混
乱した世上ですから拠出金の
負担はそれなりの資金力が必
要だったでしょう。拠出した
三名がそれぞれ素封家であ
り、個人的に負担しているこ
ころからも、小右衛門新田・
島根村・伊藤谷村の村々が負
担したのではなく、各家々が
個別に拠出したと考えるのが
妥当です。

伊藤谷村の隣村、五兵衛新
田には三月になると、新選
組(大久保大和隊)が屯所を
設けています。まさに幕末動
乱の時代に、こうした備金拠
出が足立で行われていたこと
は、従来知られていませんで
した。この古文書は当時の足
立の社会の一端を伝えてくれ
る貴重な資料です。

■千住や普賢寺村の資料

吉田家文書の中には、伊藤
谷だけではなく他地域の資料
も含まれていることも特徴の
一つです。

元禄九(一六九六)年「日

光海道千寿宿助郷帳」です。

千住宿の伝馬を補助する村々

についての制度(助郷制度)

を書き上げた帳簿です。この時期は
千住宿に固定の間屋場を整備した時
期にあたります(一丁目南端)。江
戸時代の千住宿の一つの画期です
が、これまで元禄の交通制度に関わ
る資料は希少でした。また同時期の
貸し馬についての帳簿もあり、伊藤
谷村で千住宿や江戸で用いる馬を
養っていたことが判明します。

■他の注目資料

また現在の綾瀬二丁目と周辺に該
当する東隣の普賢寺村の検地帳(三
冊)があります。これまで普賢寺村
の資料は伝来点数が少なく、本資料
の分析が行われれば普賢寺村の新た
な歴史が刻まれることとなります。
なお明治時代の資料も多岐にわたっ
ており、明治初期、小菅原時代の「報
恩社」という救済基金事業に関する資料
や明治の村の政治に関する資料
も確認できます。

以上の通り、足立の歴史にとつて
貴重な資料群であることは言を俟た
ないでしょう。これから郷土博物館
で資料整理と保存業務がスタートし
ます。調査の結果、見出せる成果に
つきましては、本誌上でご紹介して
まいります。最後になりますが伝来
保存に尽力され、この度のご寄贈で
ご高配いただきました吉田家の皆様
に記して感謝申し上げます。



寿展

めでたづくし〜くらしのなかの吉祥紋〜

郷土博物館

会期：1月4日〜2月12日

博物館では、さまざまな資料を収蔵しています。掛け軸や屏風、絵画などの「美術資料」、古文書、古典籍などを中心とする「歴史資料」のほか、「民俗資料」では、農具や商店の道具、着物や食器、信仰や儀礼の用具など、生活上必要とされてきた多岐に渡る道具が対象とされま

す。民俗資料は、民具といった呼び方もしますが、民具には、「手作り」といった条件を含み、近代工業によるものや大量生産されるものは含みません。そのため、現在収集される資料の状況からは、生活資料といった方が内容にあっているかもしれません。こうしたたくさんの方の収蔵資料はテーマを設け公開しています。

新年を迎えると同時に開催する今回の収蔵資料展では、生活資料のなかから、おめでたい柄、福を招く模様などのあるものに注目して紹介します。

日本人は、厄を除け、縁起を担ぎ、安定した生活を送ることを求めています。豊作、大漁を祈り、商業が発達するようになるとその繁盛を、さらに長寿を祈ります。日本は「言霊（ことだま）の幸う（さきわう）国」といい、言葉の霊力を重視し、悪い言葉は魔を招くため慎み、清く美しい言葉、縁起のいい言葉を使うべき



かしわざき
しほのマークと
日本石油株式会社の社章

としてきました。早い話が、大変、縁起担ぎな民族ということ、語呂合わせも大好きです。そのため、生活用具のなかに、意匠としておめでたい意味を示すものを多く取り込んでいます。その一部を紹介します。

蝙蝠（こうもり） 中国では蝙蝠の発音が「福が偏って来る」に似ているため、幸福の象徴とされ、招福のデザインに多く取り入れられています。中国由来の吉祥文様として、教養のある人々の間から日本でも江戸時代に広まりました。蝙蝠息地を新潟県指定の天然記念物に持つ柏崎市のシンボルマークは、日本海の波しぶきと「夕日のなかで楽しそうに飛ぶコウモリ」を図案化したものです。また、日本石油株式会社（現、新日本石油）は、新潟県出身の実業家や素封家たちによって明治二十一年（一八八八）に創立されましたが、長岡市で行った創立記念パーティにコウモリが舞い込んできたことから、その幸運を喜び、会社の社章に

コウモリを取り込んだ図案としたそうです。すべての幸運に通じる蝙蝠は、洗練された上品なイメージを持っていきます。

柿（かき） 柿は「嘉来」と書いて喜びが来る意味に転じる縁起のよい果物です。縁起のよい文字をあてて、そのものを自体を縁起物とするのは、結納品の子生婦（コンブ）や寿留女（スルメ）などにも見ることができ

ます。ほかにも狸（タヌキ）を「他抜」と書いて、人より勝るという意味に、富士を「不死」や「不二」（二つとはない）とするなど、言葉と文字とで縁起物としていきます。

蜻蛉（トンボ） トンボは前に進んで飛び後ろに下がらないため、不退転ということから別名を「勝虫」といいます。勝負に勝つという意味で前田利家の兜の前立てにはトンボが付けられるなど戦国武将にも好まれました。武神である毘沙門天の使いということも含め百足（ムカデ）も揃って前に進むことが好まれました。

なじみ深い松竹梅や鶴亀、鯛など、気をつけてみれば身の回りには縁起のよい図柄がたくさんあります。

道具の種類や使用方法のほかに、今回のように、図柄に主眼をおいてその意味や由来を考えてみると、そこにまた、私たちの豊かな文化を感じることができるとは思いませんか。



蜻蛉 文箱



柿 喫煙具（煙草・マッチ入れ）



蝙蝠 猪口